

近代民衆思想史研究から教科内容開発への展開：
歴史研究を踏まえた教科開発学の構築をめざして

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学 公開日: 2015-06-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 正行 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008717

(課程博士・様式9)

愛知教育大学・静岡大学大学院教育学研究科

学位論文審査報告書

審査委員

審査委員長	西宮 秀紀
委員	野地 恒有
委員	白畑 知彦
委員	星川 へいり
委員	新保 淳

審査期間 平成26年11月27日から 平成27年 1月24日

審査論文

近代民衆思想史研究から教科内容開発への展開

-歴史研究を踏まえた教科開発学の構築をめざして-

専攻 共同教科開発学専攻

氏名 鈴木 正行

生年月日 昭和36年12月 7日

提出日 平成26年11月20日

本論文は、三部構成をとっている。第一部は歴史学の枠組みで、静岡磐田郡豊田町域をフィールドに民衆思想史ないしは地域史の実証研究を行ったものであり、後半第二部・第三部は、申請者の長年の社会科教員としての実践経験を活かして、第一部における実証研究の成果をもとに、学習者の「社会参加」を促すということに狙いを定めたもので、第二部で教材開発、第三部で方法論の問題に取り組んだ。このように本論文は、実証研究、教育実践、社会認識を培うための方法論という3つの分野を総合した観点からの教科開発学という、本研究科の博士論文にふさわしい壮大なスケールを兼ね備えた研究といえよう。

しかしながら、壮大であるがゆえに、個々には問題なしとしない。

第一に、第一部で展開されている民衆史についての研究史のとらえ方が不十分である。申請者があげる安丸良夫・色川大吉・鹿野政直の研究が世に問われて以後、民衆史の再検討は多くの人びとの手によってなされているにもかかわらず、それらについての論及がない。また、先の三人の大家の研究の理解も皮相的である。性急な概念化・図式化は、個々の営みを消去してしまい、問題を平板かつ単純にしてしまう。確立された方法論にのろうとするのではなく、民衆思想史はそれぞれが自己と格闘しながら研究を紡ぎ出すものであるはずだが、そうした点が弱く、そのことが後に述べる、安易な「主体的」「参加」への寄りかかりにつながっているのではないか。第二に、第一部は申請者いうところの「注目すべきできごと」について論じるというスタイルをとるが、それでは各章のつながりが見えず、民衆像が浮かび上がらない。すべての時代を隙間なく論じることは無理でも、一工夫あってしかるべきであろう。第三に、第二部のキイ概念となっている「参加」「主体的」の意味である。申請者は安丸の研究に依拠しながら、「社会参加」の陰に抑圧された人びと、すなわち市民という範疇ではとらえきれない民衆がいることを論じてきたはずであり、そうであるならば「参加」しないことの意味についても問い返しがあっていいのではないか。申請者が用いる「よりよい」という価値自体を検討することが、安丸らがやってきた民衆思想史からの「近代」への問いではないのか。安丸から学びとるべきは抵抗であって、単純な「参加」ではない。そしてそれらから脱落したものが、申請者いうところの民衆の「暗部」すなわち利益誘導による「不正」ということではなかろう。「不正」もまた主体的に参加したことの結果であり、「参加」に抵抗してきた民衆をみつめることにはならない。その延長線上に置かれたアマルティア・センを援用しての「人間の安全保障」とのつながりも理解しにくかった。

しかしながら、丸山教信者の階層分析まで踏み込んで論じた第一章、また手堅い緻密な分析によって利益誘導による地方政治を描いた第二章は、歴史学研究からも高く評価できる。また、申請者にはほかにも地域史研究、ならびに教材研究に関する多くの論文があり、冒頭でも述べたとおり、それらをもとに歴史研究―教材開発―方法論をつなげてまとめ上げたことの意義は大きい。さらには歴史の研究をもとにそれを公民的分野につなげていったことも評価しうるものであり、以上から博士（教育学）の学位に値するものと判断する。